

作家



界達かたるさん

かいたつ・かたる（作家名） 1996年生まれ。荒尾市在住。久留米大学文学部3年生。スポーツが好きで、中学生（海陽中）の頃はバスケットに熱中していた。趣味はランニングで、フルマラソン挑戦が現在の目標

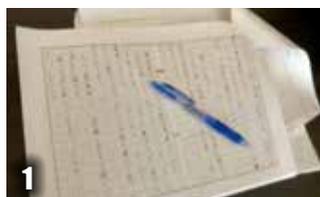
「自分の中に浮かんでくる物語を何かの形で表現したい、そう思っていた中学2年生の頃、大好きな漫画や小説と出会い、作家を志しました」と話す作家の界達かたるさん。大学に通いながら執筆活動を続け、ことし1月、小説『Jに羽根はいらない』を出版しました。「電子書籍の出版経験はありましたが、紙書籍はこれが初めてです。これまでの活動が実を結んだ気がします」。中学生の頃から執筆活動を続ける界達さんは、これまで多くの文学賞に作品を投稿してきました。2017年度は九州芸術祭文学賞地区優秀作などにも選ばれています。作品を執筆する際、界達さんが大切にしていることは読んでくれる人のことを常に意識できているかということだそうです。「誰が、どうしたといった文章の基本を大切にしたら分かりやすい表現に努めるのももちろん、この小説を誰に読んでほしいのかを明確にイメージしています。中高生に読んでほしいのか、40代の大人に

読んでほしいのかでは、テーマ、登場人物、時代背景など変わってくるのは当然です。自己満足ではなく、作品の先にいる読み手の楽しむ姿を想像して書いていきたいです」

また、界達さんの作品には、荒尾のさまざまな風景が出てきます。中でも、東屋形にある屋形山とその展望台からの景色はいくつもの作品に登場するほどのお気に入りです。「荒尾の人たちはとても優しく、つながりも強いと感じています。荒尾で育ったことに誇りを持っているから、風景も好きなんだと思います」

界達かたる、という作家名には「海達公子」*、「広い世界」「書いたつ（方言…書いたもの」「小説」「かたる（方言…加わる）」という意味が込められています。「荒尾出身の私の小説を、世界中の人に読んでほしいとの夢を込めてつけた名前。好きを仕事にするのは難しい。無理だと言う人もいますが、そういう人たちを納得させられるだけの努力を積み重ねていきたいですね」

*「海達公子」…16歳の若さで急逝した、荒尾が生んだ天才少女詩人。大正ロマン時代に活躍し多くの詩と短歌を残した



1_ 中学2年生の頃の手書き原稿。当時は一日5枚書くのが目標でした 2_ 「みかんと草枕の里マラソン」で初優勝を飾りました。 3_ 小説『Jに羽根はいらない』に登場する通学路のモデル（遠方に見える建物は海陽中） 4_ 小説『Jに羽根はいらない』の表紙。バスケットコートを舞台に繰り広げられる青春ストーリーです。「卒業後は仕事と作家活動を両立する予定です」と界達さん